

～対話型鑑賞ワークショップ in 京丹後～



日時・会場

2012年4月15日(日) 10:00～13:00

kanabun: <http://blog.kana-bun.com/>

参加者

10名(小学校教師)

開催目的

- ・対話型鑑賞の教育現場における活用の可能性を考えてもらうこと
- ・対話型鑑賞を経験してもらい、そのエッセンスから現場での指導のヒントを持ち帰ってもらうこと

シークエンス(使用作品)

作品1

「夫婦を載せた陶棺」

紀元前530-510年頃

作品2

「ニューヨークのティン・パン・アレーで泣くデイヴィッドとブッチ」

ナン・ゴールドフィン 1981年

作品3

「若い女に金を差し出す男」

ユディット・レイステル 1631年

シークエンス意図

今回は主催者の希望により「Mite ティーチーズキット」の中から、大人に親しみを感じてもらいやすいと考えられる、男女がモチーフとなった作品を選定。意見が出やすい作品、ということを一に考えた。

参加者の感想

- ・パラフレーズによって学習者は「自分の意見が受け入れられた」と感じる。
いつもは「すごいね!」「よく見つけたね!」って言いがちなんだけど、そんなことを言わなくても、「あなたは　　な意見なんだね」って言われるだけで安心する。
- ・自分は普段、すぐに「どこからそう思ったの?」って切り返していたけど、一旦、「あなたの意見は　　なんだね」と受け入れてもらえることで安心する。いきなり切り返されたらとまどうかも。
- ・ねらいを持ちすぎると失敗する。教師はついねらいにせまった意見がでるとオーバーにリアクションをしてしまう。たんと表情を変えず、どの意見にも公平にパラフレーズしていたところがすごい。
- ・だれかの意見を過剰に評価してしまうことで、学習者は「正解をださなきゃいけないのか」という感じになってしまう。「間違ってもいいよ」と言っても、指導者が暗に「間違いはだめだ」と言っていることになるのではないかな。

ナビゲーター所感

今回の鑑賞会で感じたことは大きく2点ある。1点目は先生方の高い参加意欲と学びへの姿勢、2点目は対話型鑑賞を広げていくことの意義である。

まず先生方の高い参加意欲と学びへの姿勢について。作品を鑑賞した後、参加者の方々が口にされたのはご自身の感想ではなく、生徒たちへの指導にどう活かすことができるか、という視点からの意見だった。上記感想にもあるが、意見をパラフレーズされる経験を通じて、意見を受け止められるだけで承認された実感が湧く、ということが大きな発見となったようだ。また、意見を公平に扱うことの意義も体験を通じて見出され、普段のご自身の指導を振り返る機会にもなったようだ。積極的に議論されている様子を拝見していると、今回の場から気付きや学びを現場に持ち帰るといった強い意志を感じ、私自身が見習うべき姿勢だと考えている。

続いて、対話型鑑賞を広げていく意義について。今回のケースのように対話型鑑賞には、そのプロセスを通じて自分と相手との関わりについて振り返ることができるなど、美術作品を読み解く楽しむことができるだけでなく、様々な気付きや学びをもたらす可能性が秘められている。そして、少なくとも私のまわりは、対話型鑑賞を全く知らないという人たちがほとんどで、私に対話型鑑賞を沢山の人たちに紹介していくことで、その方たちに様々な気付きや学び、新たな発見を得るきっかけを提供できるのではないかと感じている。現在、自分が主催する鑑賞会以外に対話型鑑賞ナビゲーターとしてご依頼をいただくことも増えているため、できる限り引き受けさせていただき対話型鑑賞をより広く紹介していくつもりである。